昭和四十六年度
特別研究生・研究員研究発表要旨

平安朝説話文学に見る観音信仰

石橋義秀

平安朝時代に編纂された霊異記や法華験記或いは今昔物語集などの説話文学には、観音菩薩に関する話がかなり多く見られる。

言うまでもなく、観音菩薩は維摩詰経、放光・光讃般若経等の諸経典に見えており、法華経観世音菩薩普門品には観音菩薩の娑婆世界における利益の様相が詳しく説かれてあり、華厳経には観音菩薩は南海補陀落山に住すとある。ここに説かれている観音は独立した菩薩である。一方、大無量寿経等には観音菩薩は阿弥陀仏の脇侍であると説かれているが、この場合は補陀落山の観音等とは性格が違うのである。後に述べる如く、平安朝の説話に見られる観音の大部分は、前者の独立的な観音であることは注意すべきである。

さて、平安朝の説話に観音菩薩に対する信仰はどのように記るされているか、次に見ていきたいと思う。

先ず、霊異記に観音霊験譚は十四話ある（上6・17・18・31、中17・34・36・37・42、下3・7・12・13・30）が、この内、中17・36・37は観音像が火難等に遭って自ら威神力を示すという霊威譚である。その他の十一話は人々が観音に祈念し観音より利益を蒙るという利益譚である。そこには観音に対し金銭財宝・病の回復などを熱心に願う現世利益的な信仰が見られる。その信仰態度を見ると、利益譚十一例中、上17・中34・42・下3・7・30の場合は観音像という具体的な信仰対象となるものの前で祈願している（霊威譚三例の場合も観音像に対する信仰である）。その信仰の有様は、例えば、孤の女（中34）や僧弁宗（下3）の如く、観音の手に縄をかけて福分を強引に願うという身勝手な態度である。つまり、祈願者の欲求の熱烈さが、ただ漠然と観音を念ずるのではなく、眼前の観音像に対する祈念という形をとり、さらには観音の手に縄をかけるという直接談判とでも言うべき行為となったのであろう。そのように祈願すれば、観音はいかなる人に対しても最終的にはどのような願いでもかなえて下さると信じられていたのである。

次に、法華験記には観音霊験譚は十三話ある（上26・28・31、中70・75、下85・107・113・114・115・116・123・124）。この十三の霊験譚で注意すべきは、第一に霊異記に見られた霊威譚はなく、全て利益譚であること、第二に霊異記に見られない地獄利益譚（下124）や往生譚（下116）等僅かながら後世に関する説話が見られることである。人々の信仰態度はどのようなものかと言うと、例えば、沙門感世は毎日法華経を読誦し、その中普門品を暗誦し、観音に奉仕す（下85）とある如く、多くの場合、日頃から法華経（特に普門品）を読誦し、又毎月十八日の観音の縁日には観音に仕えるというように、非常に真摯な態度である。これは、前述の霊異

記に見られた一方的に身勝手な願いごとをする態度とは大変異なるのである。さらに法華験記の説話で注意すべきは、観音と法華経とが並行して信仰されていることである。今述べたように、大抵は法華経普門品を読誦し、観音に奉仕するという具合に、法華経信仰と観音信仰とが結びついている。

最後に、今昔物語集には観音霊験譚は五十二話ある(十二ノ㉘、十三ノ㉟、十四ノ(7)・(12)・(20)・43、十六ノ①・②・(3)・4・(5)・(6)・7・⑧・9・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭・15・(16)・17・18・19・20・21・22・㉓・24・㉕・㉖・㉗・28・29・30・31・32・33・34・㉟・㊱・37・㊳、十九ノ39・40・41・42、二十四ノ25、二十六ノ3、二十七ノ13、三十ノ6)。この内、○でかこんだ十一話は霊異記に依る説話であり、()をつけた十三話は法華験記に依る説話であるが、それらは出典である霊異記や法華験記の漢文体の文章を和漢混淆文体にかえ、多少の潤色を加えたものであって、説話内容、観音に対する信仰内容ともに、前述の霊異記や法華験記の場合と大差はない。そこで、右の二十四話については省略し、その他の出典未詳の――今昔独自の説話二十八例について考察する。この二十八話の内、霊異記に見られた観音の霊威譚はなく、全て利益譚である。しかも冥界・地獄の利益譚はなく、全て現世利益譚である。人々は観音に金銭財宝・病の回復など現世の利益を熱心に願ったのであるが、注意すべきは、大抵の人が長谷寺・清水寺・石山寺等の特定の寺院の観音に祈願していることである。即ち、二十八の霊験譚中、清水寺の観音に祈願したものは八例あり、以下、長谷寺=七例、石山寺=二例、成合寺・六角堂=各一例(計十九例)ある。このように特定の寺院の観音が特に信仰されたのは何故かと言えば、岡崎知子氏が指摘されているように(「平安朝女性の物詣」、『国語と国文学』昭和41年2月号)神道の地主神の有する地域性と人格神の有する特殊性とが仏菩薩の上に移った為に、長谷の観音は長谷という特定の地域の観音として、同様に石山の観音は石山という特定の地域の観音として信仰されたのである。しかも、それら寺院の観音に利益を願う場合、殆んどの人は直接その寺院に参詣しているが、これは、前述の如く、例えば長谷の観音は長谷という特定の地域の観音と考えられたのであるから、長谷の観音の利益を得ようとするならば、各人の家から遥拝するのではなく、その霊験の及ぶ長谷の地へ出かけて行って祈願しなければならないと信じられたからである。

要するに、人々は観音を慈悲深い霊験あらたかな菩薩と信じ、その観音に金銭財宝・病の回復などを願っている。それに対して観音はどんな無理な願いごとでも聞き入れ、人々に利益を施される。観音は真に有難い菩薩と信じられている。但し、信仰の有様は各説話集によってかなり違いがある。つまり、霊異記には具象化された観音像に対する信仰が多く見られ、法華験記には法華経と強く結びついた観音信仰が多く見られ、今昔物語集には、霊異記や法華験記と同様の信仰の例も見られるが、長谷寺、清水寺・石山寺等の特定の寺院の観音、即ち、日本化した観音に対する信仰が多く見られる。尚、法華験記や今昔物語集に、弥陀の脇侍としての観音が数例、補陀落浄土に対する信仰の例が一例見られる。それについても論述しなければならないが、今はこの程度に留める。